

カリフォルニア・コミュニティ・カレッジにおける放送教育の現状と課題 ～コーストライン・コミュニティ・カレッジと放送教育～

三浦 嘉久
(鹿児島県立短期大学)

序

カリフォルニア州ではテレビ局は州民の95%をカバーしている。12の公共放送局の電波は毎週4百万人に届いているし、州人口の90%をカバーできる。また商業放送局が教育の時間を寄贈している。これらによって「テレビ大学講座」は全ての人々に開放されているといつてよい。

ここではコーストライン・コミュニティ・カレッジがカリフォルニア州で最大規模のテレビによる大学教育が行われていることで、全米に知られている。コーストライン・コミュニティ・カレッジは、1976年にコースト・コミュニティ・カレッジ学区の第三番目のコミュニティ・カレッジとして創設された。コーストライン・コミュニティ・カレッジは開学のとき18,574人を受け入れたが、これは開学時の入学者としては過去最大である。当初からコーストライン・コミュニティ・カレッジは教育を人々のところに運ぶ「壁のない大学」(College without walls)として構想された。

本研究は、コーストライン・コミュニティ・カレッジにおいてテレビ科目を受講している学生の実態を通してテレビによる高等成人教育の教育的意義を検討しようとするものである。

なお、本要旨で使用した統計は、Byerly, Jack Rober, "An Investigation of Factors That Condition Student Enrollment in Broadcast Courses at Coastline Community College" (1982) により作成したものである。そしてここにコーストライン・コミュニティ・カレッジの学生とは、1981年度の春学期に在学した者である。

一 コーストライン・コミュニティ・カレッジの現状

1

コーストライン・コミュニティ・カレッジは、オレンジ郡にあるが、ここは6市からなる都市的地域で総人口60万である。この地域は国際的な規模の観光業、エレクトロニクス、最新医学産業が多い。

教育は市の施設、近所の学校を含む150の地点において有線、無線のテレビによる遠距離通信技術によって行われている。

準学士に必要なおよそ一般教育科目は大学のテレビ科目で満たすことができる。またテレビ科目 (telecourse) は全てカリフォルニア州立大学機構に編入されるし、カリ

フォルニア大学にも編入されるものが多い。

2 テレビ科目を取った理由

(1) テレビ科目を取った理由

第1表 テレビ科目を取った理由

理 由	%
1. 準学士の単位を取るため	22.5
2. 四年制大学編入のための一般教育の単位を取るため	20.6
3. 時間節約のため	17.9
4. 個人上の便宜のため	9.6
5. 自分を高めるため	9.0
6. 費用がかからないから	6.7
7. 仕事上の便宜から	2.7
8. 自分のペースで学習できるから	2.7
9. 現在の職務能力を向上させるため	1.7
10. 交通の便がよい	1.2
11. 職業の資格を得るため	0.6
12. 就職に必要な技能を身に付けるため	0.2
13. 社会的な交わりを求めて	0.0
14. その他	0.4

100.0

(2)

最も大きな理由は学士号取得につながるものである。その他に近づきやすさ、職業生活上の利点や個人的満足など生涯学習の機会を拡充する場合の理由が挙げられている。

2 テレビ科目を取る学生の特徴

(1) 特徴

第一に大学に通学する同輩の学生に比べると年齢的に高いということである。これは今日のコミュニティ・カレッジの学生に共通している

平均年齢は30歳と40歳の間である。年齢的な幅も大きく高校の最上級生から80歳近くにまで及んでいる。(参照、第2表)

第2表 学生の年齢

年齢層	%
1. 17歳から19歳まで	10.2
2. 20歳および21歳	8.9
3. 22歳以上24歳まで	10.0
4. 25歳以上29歳まで	18.7
5. 30歳以上34歳まで	17.1
6. 35歳以上44歳まで	20.8
7. 45歳以上54歳まで	10.4
8. 55歳以上64歳まで	2.5
9. 65歳以上	1.3

第二に働いている成人で過去に大学生活を多少なりと送った経験を持つ者が多いことである。(参照、第3表)

第3表 学生の学歴

学歴	%
1 1学年以下	2.3
高校卒業資格取得	9.8
大学1年	38.3
大学2年	34.4
専門職業技術資格取得	3.7
準学士	11.2
学士	5.4
修士	2.1
その他	2.9

(2)

テレビを土台にした科目は、多数の学生に到達する可能性を持っている。テレビ科目は教育の次元を拡大し、これまでに見られなかった多くの学生を大学に引き寄せていることは紛れも事実である。さらにいえばテレビ科目については、大学に入学して来ない潜在的な視聴者も想定すべきであり、これも相当な数になると推定されている。特に年長者、既婚者、被扶養者、フルタイムで働いている学生に特に魅力的なようである。

このように見ると、コーストライン・コミュニティ・カレッジのような大学は、単なる高等教育機関ではなく、成人のために高等教育の機会を提供している高等成人教育の機関というべきであろう。

二. テレビ科目が果たしている役割

1

第4表には学生が下した構成要素の各評価ごとの%が示されている。

第4表 テレビ科目の各構成要素に対する学生の評価

構成要素	1	2	3	4
テレビ科目の内容	30.3	43.3	24.4	1.9
学習支配人	28.4	48.9	19.3	3.4
テレビによる学習それ自体	28.3	43.8	25.0	3.0
テレビ科目の教育方式	28.0	42.7	25.7	3.6
家庭での小試験、定例の応答	27.5	34.6	33.5	4.3
テキスト	25.8	41.4	29.0	3.8
教職員、入学手続き、大学事務	22.4	47.5	26.5	3.5
学習指導書	22.3	43.0	30.3	4.3
客員講師	18.6	39.8	38.4	3.1
学生用ハンドブック	18.0	39.7	38.1	4.2

評価 1. すばらしい 2. よい 3. 満足できる 4. 不満足

2

学生は、テレビ科目を色々な意味で教育的に高く評価していることがうかがわれる。

三 まとめ

コーストライン・コミュニティ・カレッジは、放送による高等成人教育の可能性とその条件を示すものである。

可能性を保障する条件を学生の側から見れば、大学の教育課程と教育方法の良さにあるようで、この場合にテレビが占める意義は非常に大きいものがあると思われた。

(本研究は「放送文化基金」の援助によるものである。記して感謝したい)